# 飲酒運転違反者からの反省文(要旨)

私は平成29年○月○日、飲酒運転をして逮捕されました。

当日は会社の懇親会があり○○駅近くの居酒屋での会合に出席、その後、カフェバー等合計3軒のお店でお酒を飲み、タクシーで帰ればよかったのですが、会社の近くでもあったことから、一旦会社に戻った後、通勤に使っている原付バイクで「大丈夫だろう」という安易な考えで運転して帰宅してしまいました。

いつも帰宅する道を通り、前を走る乗用車(覆面パトカー)を追い越したところ、バックミラーに赤色灯が光っているのが見え、「警察」と思ったと同時に怖くなり頭が真っ白になって、逃げる途中に角を曲がりきれずに転倒してしまい、逮捕されることとなりました。

後で警察官から信号無視や一方通行の逆走をしたと聞き、人身事故を起こす可能性が十分にあったと思うと本当に恐ろしくなりました。

警察車両に乗せられアルコールの検査を受けた結果は0、49、基準値の3倍を超えるものでした。

実は6年前にも飲酒運転で検挙され、罰金30万円と免許取り消しの処分を受けたことがあり、その後、2年間の欠格期間を終え「飲酒運転は絶対にしない」という気持ちで再度免許を取得しましたが、前回と今回はまるで違っていました。

一番大きく違った点は、前回は逮捕され留置場に入ることはなく、手錠をされることもありませんでした。留置場は私の想像していたものとは遥かにかけ離れたもので、捕まった後、午前7時前に手錠と腰紐をされたまま留置場に連れて行かれました。手錠をされる度に「自分は犯罪者なのだ」と心が崩されていく感覚になり、取調べが終わると帰宅できると思っていた私は愕然としました。

留置場では、歯ブラシ、タオル等の洗面用具の購入を勧められ、やっと事の重大さ「帰ることができないこと」を認識しました。留置場では番号で呼ばれ私は「○○番」でした。

私が留置場に入った午前7時は、起床時間でしたが「寝て良い」と言われたものの、当然一睡もすることはできません。この時間は自宅で妻も子供も目を覚ますころですが、そこに私はいないのです。

釈放後に、携帯の着信を確認すると午前7時26分に妻からの2分近くの着信の記録がありました。妻がその2分間どんな気持ちで電話していたのか、電話がつながらなか

った時にどんな気持ちでいたのか、子供を学校に送り出すときにどんな気持ちだったのかを思い、本当に本当に申し訳ないことをしたと感じ胸が締め付けられました

留置場の中で、一睡もできないまま横になっていると、食事の時間となりましたが、とても食事を取る気持ちにはなれず、取調べが始まりました。

まず全身の写真を撮られ、全ての指紋、掌紋をとられ、唾液もとられ、これも前回の飲酒運転の時には全くなかったことで、本当に事件を起こしてしまったのだと再認識させられました。

その後、乗っていたバイクを確認し写真を撮りましたが、バイクのサイドカバー付近は割れて破損しており、本当に人身事故を起こすことなく良かったと思うと同時に、私自身が妻と子供を残し死んでしまった可能性もあったと本当に恐ろしくなりました。

午前の取調べの後、食事の時間となりましたがやはり食事を取る気持ちにはなりません。

午後の取調べが始まり、私の生い立ちと事故の経緯を説明しましたが、事実を確認していくことで自分がどのような過ちを犯したのか本当に辛くなる経験でした。

もし飲酒運転をする前に戻ることができるのであれば、死んでも飲酒運転をすることはありませんが、これは飲酒運転をし逮捕されてしまった私だから思う気持ちで、当時の私には、この気持ちはありませんでした。本当に情けないことです。

午後5時過ぎに取調べが終わったところで、当番弁護士の方と話すことができ、自分の置かれている状況と今後、手続きがどのように進んでいくのかを知ることができました。

また、弁護士の方に妻に私の状況を伝えていただくようお願いしました。妻の性格から誰にも相談できずに自分の中で抱え込んでしまっているのではと考え、弁護士からの電話で少しでも安心してほしいと思ったからです。

弁護士との面接が終わり、夕食の弁当を渡され、このとき初めて食事を取ることができました、この時のお弁当は、とんかつ弁当で、味は一生忘れることはありません。

夕食後の取調べで、妻と職場の同僚も事情聴取を受けたことを知り、私の状況が伝わっていることで少し安心したものの、取り返しのつかない迷惑をかけてしまった罪悪感で押しつぶされるような気持ちになりました。

取調べが終わり、留置場に戻り初めて洗面の時間で歯磨きと顔を洗うことができ、逮捕されてから檻の中以外で初めて手錠が外れた時間で、自分の顔を自分で洗うことができるという普段当たり前のことが、こんなにも自由に感じることは二度とありません。

洗面を終えたところで、妻からの差し入れ品として衣類の替え渡され、この時、逮捕後

初めて、妻が私の事をまだ思ってくれていることを感じて、心のそこから嬉しくなり涙がこぼれました。

ですが、その夜は長く、飲酒運転してしまった後悔と、今後の不安、何より家族を守れなくなってしまう恐怖が押し寄せてきました。普段寝るときは横に妻と子供の寝顔が見え、手を握ることができますが、どんなに思っても家族に気持ちを伝えることもできず、長い長い夜はまるで時間が止まっているように感じ、どれだけ後悔しても、どれだけ家族のことを思っても「このまま許されることはない」と言われているようでした。

次の日、午前中に取り調べはなく、勾留期間が延びるのではと不安になりましたが、昼食後、午後1時過ぎに私の番号が呼ばれ、いつもであれば心を折られる手錠をかけられるのですが、私物の着替えをまとめるよう指示を受け、出ることが出来ることが分かったのですが逆に出ることへの不安感が押し寄せてきました。

留置場を出た後、警察官と、私が飲酒した店と運転した経路を確認し、運転した距離は2、5キロと伝えられ、その間人身事故を起こさなかったことが本当に良かったと感じました。

現場確認が終わり、署に戻り妻が迎えに来ることを告げられましたが、正直、妻にどのような顔で会えば良いのか分かりませんでした。謝罪の言葉などでは到底伝わらないことも分かっていました。そこで携帯電話の着信を確認することが出来、この時初めて捕まった朝に妻から連絡があったことを知りました。

20分ほど椅子に腰掛けて待っていて、ふと顔を上げると妻がそこに立っていましたが、何も言葉が出ません。殴られて罵倒されても当然の状況です。

そんな私に妻は「怪我は大丈夫」と声を掛けてくれました。

妻の運転する車で帰宅することが許され、車中では、娘の帰宅時間を考え私の母に連絡を取り自宅に来てもらっていることなどを聞かされましたが、私を責める言葉はなく核心に触れない会話が続きました。

自宅に着くと本当に帰ってこられた安心感とこれから突きつけられる現実に不安になりました。

家に帰ると妻から入浴を勧められ、留置場で着たものは捨てるよう言われましたが、私は「このことを忘れないように取っておこうと思う」と返した私に対し、妻は「物で思い出しても意味がない」と一言言われ、自分のそんな物に頼る甘い考えであったことが恥ずかしく、確かに今回のこと、留置場での経験は物に頼らなくても一生忘れることはありません。

風呂から上がり、妻と向き合い、今回の経緯を警察に話すように説明しましたが、謝罪の言葉では当然足りず、私の信用は既にありません、「子供がいなければ離婚していた」と告げられ、私は今後どのようなことをしても償っていく覚悟があることを説明しましたが、妻から「それだけ、他には」と尋ねられ、妻は子供のこと、私の両親の事、私が犯した過ちでどれだけの人に迷惑を掛けたのか、その人たちがどのような気持ちだったのかが気にならないのかと憤りをあらわにしました。

娘には私は事故にあって病院に行っていることになっていると説明され、私が帰らなかった日に娘がどれだけ泣いていたか、妻の両親にはまだ知らせておらず、私の実家に連絡した際に、母が泣いていたことも告げられました。

改めて、夫として、父親として、子供として、本当に取り返しのつかないことをしました。

しばらくして娘が帰り、私が事故で入院していると思っていた娘は、私を見て驚き、喜んでいました。つい笑顔をこぼした私に、娘は「お父さんバイクは危ないからお守りをあげる。付けてね」と手作りのお守りをくれました、娘の手前笑顔で受け取りましたが、今でも思い出すと涙がこみ上げてきます、このお守りは私の一生の宝物です。

翌日、午後4時に出社を命じられ、その結果は当日付での懲戒解雇でした。

その後、同僚に十分な謝罪もできぬまま、人事担当者が自宅まで制服、保険証を回収に来ました、覚悟はしていたものの無職となった現実が突きつけられたのです。

私は家族の大切さを自覚しておらず、一緒に生活できるのが当たり前だ、家族は私が養って支えているのだと馬鹿な自信がありました。自分の行動にどれだけの責任が伴い、その結果、他人や家族の人生を台無しにする可能性があることを何も自覚していなかったのです。

留置場で過ごした二日間は私の人生観を全く変えるもので、何もかも今まで見えていた景色が全く違うものに見えます、自宅も何も変わらず建っていますが二度と事件前の自宅に戻ることはありません。

飲酒運転も殺人も関係なく、同じ犯罪者です、留置場にランクわけはありません、後悔している人もいれば何度も繰り返している人、話をすれば普通ですが、外から見れば罪の重さなど関係なく、皆同じ犯罪者です。子供の父親、妻の夫、母の子として一生この事実は消えることはありません。留置場の中では無力です、大切な家族に言葉ひとつ届けることも出来ず、何も出来ません。

仕事が解雇と通告されて以降も、妻とは何度も話をしていますが当然私に対する信頼は全くありません、言葉でいくら話したところで何の意味もないのです。

やるべきことは信頼を回復するように努力する自分の姿を見せること、それを見せ続けることです。難しいことかもしれませんが今は留置場の中でなく、家族のために頑張ることが出来ます。伝えること聞くことが出来ます。

今後の収入面等での不安はありますが、留置場の中の状況を思えば努力することが出来る自由に喜びすら感じます。今回の過ちで私は数え切れない大切なものを失いましたが、今回の経験で得た大切なことがあります。

「本当に自分と向き合うこと」

「本当に人を思いやる気持ち」

「本当の幸せとは何か」

これらの本当の大切さと意味を当然に持っている人のほうが多いのかもしれません。ですが、私は、今回の経験でしか得ることが出来ませんでした。

自分の中に足りなかったものが「自覚」として身体の中に作られました、事件後見える景色は不安と後悔で全く違うものとなりましたが、何気ない一瞬でも本当の幸せを感じることができるようになりました。

今後どのような道を進むことになっても、私にできることは、今後一生を掛けてその景色を明るいものにすることです、子供の無邪気な笑顔を見るたびに心に誓うことが出来ます。

私は、もう一生お酒を飲みません。

以下、妻作成の「誓約書」要旨

この度、夫が平成29年〇月〇日に行った飲酒運転により多大なご迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。

今回の件について、夫婦間で深く話し合いました。

夫も軽率な考えであったことは猛省しておりますが、今後の動向を見守る必要があると感じております。

今後、夫が二度と同じ過ちを繰り返さないように見守り、監督することを誓約いたします。